

【研究主題】 提案文×AI×シンキングツール

【副題】 ~多角的に考え、書く力を育てる国語の授業~

【所属校名】 滋賀県 長浜市立湯田小学校

【職名・氏名】 教諭 小多 拓斗

<主題設定の理由>

近年、生成AIの発展により、文章を「書くこと」の意味や価値が問い直されるようになっている。AIがわずか数秒で論理的な提案文や感想文を生成できる時代において、子どもたちが自らの考えをもとに構成し、言葉を選び、表現していく意義とは何かを教育現場でも再考する必要がある。

本実践は、小学校6年生の国語科「デジタル機器と私たち」の単元において、創造性と論理性を育むための試みである。フィクション教材「未来人からの手紙」を導入し、子どもたちが未来の社会に生きる人物の困りごとや課題を読み取り、現在の視点から提案を考えるという構成とした。これは、単なる作文指導にとどまらず、課題発見と問題解決の姿勢をも引き出す学習活動である。

また、自らの書いた提案文と生成AIによる提案文を比較し、その特徴を読み取る活動を通じて、AI時代における人間の「書く力」の意味を内省的に考察させることもねらいとした。そのうえで、シンキングツールを活用し、思考の構造化や深まりへとつなげることで、多角的な視点と論理的な表現力の育成をめざした。

<内容と方法>

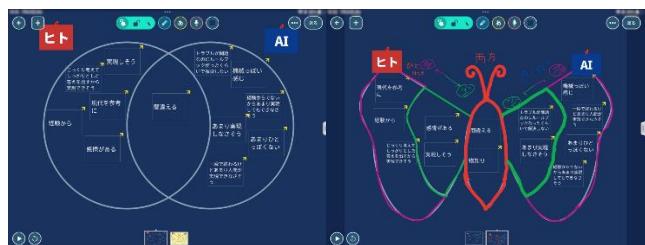
授業のはじめに、教師が用意した10通の「未来人からの手紙」を提示した。内容には、空飛ぶ車による危険な通学や、あいさつをしない社会、味気ないカプセル状の食事、AIが全て判断する人間関係など、子どもたちが驚きや疑問をもてるような未来の課題が書かれている。児童は興味のある手紙を選び、自分なりの提案を考える学習課題とした。

次に、提案文の基本構成「①未来の現状と課題②提案③まとめ」を学習した。これにより、児童は書くべき内容の流れを理解し、筋道を立てて考えるための枠組みを得ることができた。その成果もあり、実際に提案文を書く活動では、未来人の手紙の内容に応じて、自分なりに工夫した提案を書き進めていく様子が見られた。

文章が完成した後は、教師があらかじめ生成AIに書かせた提案文と自分の文章を比較する活動へと移行した。「構成」「語彙」「表現」「説得力」などの観点から両者の特徴をシンキングツールにメモしていく。その後、ベン図を使って、「自分にしか書けないこと」「AIにできること」「共通していること」などを視覚化することで、人間の

書く力の特徴やAIとの違いについて内省する機会とした。

最後に、これまでの活動をもとに、児童自身でシンキングツールに発展させていく活動を行った。バタフライチャートやピラミッドチャートなど、ロイロノートの機能を活用し、人とAIの特徴について構造的に整理・可視化し、多角的にとらえる視点の定着を図った。



<成果と課題>

本実践を通して、児童の学びには複数の成果が見られた。まず、未来人の手紙というフィクション教材を活用することで、課題設定が児童にとって他人事ではなくなり、「未来のために自分ができることを提案する」という主体的な意識が生まれた。従来の提案文の授業では見られなかった、自発的な思考の広がりが随所に表れた。

また、生成AIとの比較を通して、自分の文章への見方が変わった児童も多かった。「AIの文は整っているけど、どこか冷たい気がする」「自分の体験があるから、これは私にしか書けないな」など、感覚的だった自己表現が、自覚化されていった。AIと人間の違いを「正解／不正解」ではなく「価値の違い」として捉える視点は、情報リテラシーの基礎とも言えるだろう。

さらに、ベン図をはじめとするシンキングツールの活用により、文章の背景にある思考や価値観が可視化されたことは、学習の深化に大きく寄与した。「どこが同じで、どこが違うか」「その理由はなにか」を図にしながら対話する中で、論理性や説明力も育まれていった。

結びとして、本実践は、ICTやAIを単なる技術としてではなく、思考と表現を支える“道具”として捉え、創造性ある言語活動を追究した試みである。

今後も、テクノロジーと学びを結びつけ、子どもたちの内発的な表現力を引き出す授業づくりを進めていきたい。